

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



第24回平和展開会式 1945(昭和20)年3月19日、米軍の空襲により類焼、炭化した信道会館に安置されていたご本尊を前に関係者がお勤めをした。(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・現代社会と真宗教化
想像力が未来を拓く ②・③・④
ブックドクター“しんちゃん” ⑤・⑥
- ・書籍紹介 ⑥
- ・第24回平和展を終えて ⑦
- ・研究生報告 ⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆挟み込み※寺報などにご利用ください

「我と汝」「我とそれ」

いま、この時代に言葉はあふれ、人それぞれの価値観も多様化している。しかし、人間にとってほんとうに大切なことを伝えてくれる人がいない「よるべなき時代」に、私の理性を、よるべなきよう躍起になっている。

そんななか、三月二日恩師である神戸和磨先生が行年七十五歳を一期に、お浄土に還られた。憶えば教指に、

二河譬に、人と生まれたことをこの身の衷心に受け止めたいという大菩提心は、我が身の三定死を思い「すでに、この道あり」と念じたときに発る。そのとき行者の背に向かって東岸に居られる世尊が「仁者」と勧め、また西岸に在す弥陀が「汝」と喚ぶ。二尊は、この至上の願いをおこした行者を尊崇し「仁者」「汝」とよびかけたのである。

(「正信念仏偈に学ぶ」より)

と、述べられた。私たちは、朝起きたら何をなにして、理性とともに生き、理性が自分そのものである。頼りにしている理性だけは間違えないと思っている。しかし頼りにしている理性の中に、信頼できないものをチラチラ感ずるのである。感

ずるほどに信頼しようとし、信頼しようとするほどに疑いが深まる。そういう気持ちこそ不安といふのではないか。その不安を理性によって回避しようとするのも人間である。動物は「相手の負けサイン」の元に争いは止むが、人は「相手の負けサイン」と言っても殺すまで争い続ける。不安がそうさせる。我に不安をもたらす他者を「それ」と理性が捉えたとき、出会った他者をモノ化し人間性を疎外する。

すべてを「それ」とする不安の中を生きる私の闇を破るのはこの身の事実、「死」である。また高上りした理性を、この身の脚下の現実には喚び戻す用きが二尊の「仁者」「汝」と喚ぶ声である。人間の本来の願いが名声となつて聞こえたとき、自我分別のみを理性として生きてきた「我とそれ」が破られる。大地深くに交わるいのちの根を繋げ、ともに生きる「我と汝」との関係に転じられてくる。

多くの犠牲を伴った東日本大震災と福島第一原発事故から二年。善し悪しを越え私はいったい何を学んだのか、心もとないことである。まさにこの震災から教えられたことは、「我と汝」の関係においてのみ、よるべとして浄土は開かれてあったということである。

(教化センター主幹 荒山 淳)

現代社会と真宗教化
2013年2月1日(金)

想像力が未来を拓く ブックドクター しんちゃん

NPO法人 ほがらか絵本畑 理事長
三浦 伸也 氏



「生きづらい」と言われる現代、老若男女、地域や世代を問わず誰もが不安を抱えて生きている。

しかしながら、不安を抱えて生きることは、現代に限らずいつの時代も変わらぬ人間の問題である。なぜ今、「生きづらい」「不安」ということがクローズアップされるのだろうか。それは、現代に生きる私たちに無自覚の間があるからであろう。

今回、「子育て(子どもから教わる)」という視点から、絵本を読むことで子どもだけでなく大人の心も解放する『ブックドクター しんちゃん』(NPO法人ほがらか絵本畑 三浦伸也氏)を、三重県多気児童館で行われた講演会場に赴き取材した。

延べ十万人以上の子とも達と接し、毎月東北へ通い続ける三浦氏が感じられていることは、現代に生きる私たちの間に一点の光を灯す一助となると思い、講演の抄録を紹介させていただくことにした。

自己紹介

僕は『ブックドクター』という仕事をしていきます。絵本を読んで、元気になってもらうという仕事です。こういう仕事はなかったので十年前につくりました。

普段は保育園や幼稚園で絵本を読むことが多いのですが、小学校や中学校、高校や企業の研修会からも依頼があり、絵本を使ってお話をしています。また、お寺さんでの法要後にも、お檀家さんにお話をすることもあります。有り難いことに、最近では年間三〇〇本程の依頼をいただき、ほぼ毎日どこかで絵本を読んだり、

子ども達のすごい力

お話をしています。

この仕事を始めてから、延べ十万人以上の子ども達に出会ってきましたが、子ども達は本当にすごい力を持っています。

子ども達にとっては、絵本の中だけがおはなしの世界ではないのです。読み終わった後もおはなしの世界が続いていくのです。

たとえば、『それはひ・み・つ(講談社)』という、ネズミくんの秘密についての絵本を読んだ後に、「秘密がある子?」と聞くと、手が挙がります。「その秘密を

しんちゃんだけに教えてくれる子」と聞くと、「いいよお!」と結構手が挙がります。これが面白いんです。

四歳の女の子は、すーっと近づいて来て小声で「あのね、わたしね、おもしろいね、なかでね、ココア飲んでるの」(笑)。もお、たまらないですね。大人には真似できない秘密ですね。あるいは三歳の女の子。「わたしね、テレビのうしろにね……ゴミほってるの」(笑)。奔放ですね。そして、おはなしの世界を自由に歩きまわっている感じがします。

子ども達の変化

子ども達の様子が三年ほど前から変化

してきています。

落ち着きがない子が本当に増えました。落ち着きがないというのは、アピールが強いのです。極端な例では、絵本を読んでいる間ずっと話しかけてきます。または、他の子達が笑っていても「全然おもしろくない!何がおもしろいねん!」と言っています。これもアピールです。お話の世界でたっぷりと遊べないんです。

『しんちゃんでもいいけれど』(ビリケン出版)という絵本があります。子どもが自転車走っていると、巨大な道や巨大な木、巨大な蟬に遭遇します。一昔前は、子ども達は「何でえー」と言っていて喜んでいました。ところが最近はおるかそんなもん」という反応をする子が結構います。

さらに、「間」ができづらいのも、最近の子の特徴です。次の展開を待てないんです。「間」は、それぞれの子たちが想像しているからできるものです。読み終わっても、おはなしに浸る間もなく「次は!」と次の絵本の催促があります。明らかに想像力が低下しています。

「ムリ」「めんどくさい」

小学生の間でも想像力は低下していると感じています。キーワードは、「ムリ」「めんどくさい」。この言葉をよく聞く小学校では、斜に構えている子が多いです。

「君ちよつと前来てくれる?」「え、オレ? ムリムリ」。一昔前は「え〜!」という反応でした。まだコミュニケーションが成り立ちます。「ムリ」はシャツトアウトです。高学年から中学校になると「めんどくさい」という言葉も出てきます。これらの言葉をよく聞く小学校で、「大人になったら何になりたい?」と聞くと、共通した答が返ってきます。「わからへん」「まだ考えてない」。

逆にこの言葉をあまり聞かない学校の子は、素直にお話の世界に入れます。「大人になったら何になりたい?」と聞けば、それぞれに「パティシエ」「サッカー選手」「警察官」など、いろいろと出てきます。想像力が低下すると、希望を見出せなくなります。希望というのは、まだ見えないものを描く力です。希望が見出せない、目先のことに反応します。目先のことで意識にのぼりやすいのは、不快なことです。だから愚痴が多くなります。

二歳前後から言葉を覚え始め、あつという間に一人前に喋るようになります。小学校低学年くらいまでは、まだ論理の枠組みができていませんので、意味を考へることは苦手です。しかし、そのぶん自由奔放におはなしが広がります。

幼児期におはなしの世界で遊べるかどうかは、将来、希望を持てる大人になれるかどうかというくらい大事なことだと

思っています。

おはなしの世界

子どもがおはなしの世界で遊ぶためには、大人がほんの少し誘ってあげればよいのです。

春になると子ども達は、ダンゴムシとお友達になります。子どもがダンゴムシをいじっていると「早よ帰るよ!」と手を引く張られていく姿をよく見かけます。その時に、たとえばこのように、「どれどれ? あゝ灰色のダンゴムシかあ。残念やったね。あのねえ、一生に一度、運が良かったらピンクのダンゴムシと出会うよ!」「ほんま?」

翌日また聞きます。「ダンゴムシ見なかった?」「う〜ん...」その翌日も聞きます。だいたい三〜四歳くらいの子だったら、一週間くらい聞き続けると「うん!」って言います(笑)。そうしたら「よかったねえ〜!あのダンゴ虫見つけた子は幸せになれるんよ! ママ、見つけたんだよ。だから今幸せでしょ!」これ、おはなしの世界です。

でも、こういう話をしていると、「ピンクのダンゴムシが嘘だと分かったら、どうするんですか?」と言われる方がいますが、そういう方に僕は言いたい。お月さんを見ながら「ママ、ウサギさんどこにいるのかなあ?」と言

うと「ママ、今日はクレイターがはつきり見えるよね」と言う子のどちらが好きですか? (笑)。やっぱりおはなしの世界の

方が、ボクは広がりを感じます。それにピンクのダンゴムシも、実はまだ見つかっていない新種かもわかりません。人間の知っている事など知れていますから、事実が事実でないかより、世界が広がることの方が僕は大事だと思います。

寂しがっている子ども達

昔は、落ち着きがない子の背景には家庭の事情がいろいろとありました。けれども今は、一見、ごく普通の家庭の子が落ち着きがないのです。それは、乳幼児期のお母さんとの関係が希薄になってしまっているからです。無自覚のうちにも、子どもたちが寂しがっている状態になっていることがあります。

子育て支援センターなどで、おっぱいをあげながら携帯電話を見ているお母さんを何度か見かけました。テレビを見な



がらということも含めてこの「ながら授乳」の割合を調べた大学があります。結果はなんと八割です。

「ながら授乳」がすべて悪いとは思いません。二十四時間ずっと子どもと一緒にいるから、息抜きも必要です。ただ、今は、おっぱいをあげながら何か他のことをするツールが多くあります。それが日常的になるとやっぱ子どもは不安になると思います。

『ぴょん』(ポプラ社)という絵本があります。蛙や猫などがぴょんと飛び跳ねる絵本です。二歳ぐらいの子ども達と一緒にやってみようかと跳ねます。0歳〜一歳ぐらいの子ども達はお母さんが「ぴょん」とやってみていたのは数年前の風景です。最近ではあまり見かけません。膝の上の我が子をじ〜と覗き込むように見えています。子どもは、お母さんが一緒にやってみようかと跳ねるから安心するのにな...。

あるいは、保育園でのお迎えの時に、仕事着のまま、真つ先に迎えに来てくれたお母さんの子ども達は、ほぼ例外なく嬉しそうに帰って行きます。ところが、ずいぶん前に迎えに来ていたのに、駐車場でお友達とずつとお喋りしてから迎えに行くお母さんの子ども達は、あまり帰りがたがらない子が多いのです。きつと何かを訴えているんでしょう。でも論理の枠がないから、本人たちも何でイライラ

しているのかわからないんです。

子ども達は、寂しいんです。不安なんです。だから次の世界への一歩が踏み出せないんです。乳児期の次の世界は、幼児期のおはなしの世界です。そこに一歩を踏み出せない。さらに次の世界は、小学校での広い校友関係。そこにも一歩が踏み出せず、そのまま中学生高校生になって、孤独の中で苦しんでいる子たちが日本中にたくさんいます。根っこは、安心感があるかないかです。

信じる力

しかしながら、どんなに寂しがっている子でも、どこかに安心できる環境があれば、すぐにおはなしの世界で遊べるようになります。なぜなら、彼らはバックグラウンドに大きなものを信じているからです。だから信じる力が揺るぎません。それは「お母さん」です。皆さんが思っている以上の、想像を絶する力で信じています。それが分かったのは、悲しいことに虐待の現場です。低年齢の子の虐待の現場では共通していることがあります。

愛知県で起きた幼児虐待死のケースです。毎日、殴る蹴るが繰り返されてきました。身体じゅうにアザがあり、顔にも殴られた傷ができていました。ある日、お母さんと一緒に出かけた時、近所の人

がその子の顔の傷を普通に心配して尋ねました。お母さんが「ちょっと転んだのよね？」と答えると、その子は「うん。ボク泣かなかったよね」と言っただけで母をかばいました。これは低年齢の子の虐待の現場で共通しています。

四年前に起きた放置（ネグレクト）のケースでは、一歳と二歳の子を一ヶ月間家に鍵をかけて放置しました。最初から殺意があつての放置です。一ヶ月後、お母さんは子ども達が死んでいる事を確認するため、様子を覗に行きました。一ヶ月間ですから一歳の子は亡くなっていますが、二歳の子は奇跡的に生き延びていました。

二歳の子は水道水を飲み、家中の生ゴミをひっぱり出して食べていたそうです。それがなくなると、冷蔵庫の中のものを手当たり次第に食べ、最後はマヨネーズを吸って生き延びていました。やせ衰えたその子が、ふらふらと出てきたからお母さんは呆然としました。お母さんに近づいて来て、そのやせ衰えた手でキユツと抱きついたそうです。そして、か細い声で一言「ママ、おそかったよ」と言ったそうです。

子どもはお母さんが帰ってくるのを待っていたのです。まさか自分が殺されようとしているなんて、微塵も思っていないんです。毎日マヨネーズを吸って「ママおそいなあ、おなかすいたなあ、

早くママのご飯はん食べたいなあ」とそう思いつながら待っていたのです。それが、子ども達がお母さんを信じる力です。

皆さんのお子さんも、そういう力で皆さんのことを信じています。だから子ども達にとつては、おはなしの世界を信じていることなど簡単です。問題は、その子ども達の一点の曇りもない信じる力を、大人が信じてあげられているのかどうかです。

是非、我が子の信じる力を信じてあげてください。そのためには、自分自身も信じてもらっていたということを思い出してください。

ずっと昔から、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんに、信じてもらって生きてこられたのではないのでしょうか。ついつい、そのことを忘れてしまいます。そうなる不安になります。大人も同じです。誰かに信じてもらっている。守ってもらっているという背景があるから、安心感があるのです。

ひよつとしたら、お父さんやお母さんだけではなくて、まだ会ったことのないご先祖様も、みなさんのことを信じ、見守ってくれているのではないのでしょうか。

安心して子ども達を見守ってあげてください。

落ち着いている子ども達

ここまで落ち着きのない子の話をしてきましたが、東北の被災地で、全ての子ども達が落ち着いている町に出会いました。僕は、震災があった一カ月後から毎月被災地に出かけ、陸前高田に御縁ができたのですが、初めての陸前高田は本当に驚きました。海側だけでなく、海から四〜五キロ離れた山の中も瓦礫です。最初は当てもなく保育園を探し、やつこの思いで保育園を見つけました。

保育士さんがとても素敵で、みんな一生懸命なんです。まだ給水車が来ているような不安定な状態のなかで、園庭で「先生についておいで」と元気な声をかけ、そのあとを子ども達が嬉しそうについて走りまわっています。先生方の熱心さに



感心しました。陸前高田のどの保育園でもそうでした。「先生方すごいねえ」と声をかけると、不思議なことにとどの保育士さんも「違います、違うんです」と同じ反応でした。ある先生が園庭を指差して「あの子、お父さんを亡くしました。あの子はおじいちゃんとおばあちゃんを亡くしました。あの子とあの子は、家を流されました。あの子達、辛い思いをしているのに、少なくともここに来たら笑ってくれるんです。だから私達はここに来れているんです。あの子達に助けもらっているんです」と。

帰り道、僕の気持ちは全然違っていました。希望を感じるんです。瓦礫だらけの町の中から、子ども達の笑い声が聞こえるんです。子ども達の笑い声は、大人を癒すとかそんなものではありません。町を支えているんです。すごい力です。希望そのものなんです。そして被災地に通い続けていると、子ども達の笑顔や笑い声を本気で守っている保育士さん達の姿を知っていききました。

子ども達を本気で守っている

最初に保育園で絵本を読ませてもらった時に、対応してくださったK先生はとても素敵な方です。でもその先生、笑顔がありません。「この先生笑ったらもっと可愛らしいのになあ」と思いな

がら絵本を読んでいたら、時々笑ってくれました。「ああ、やっぱり笑ってる方がかわいい！」

翌月、また絵本を読みに行きました。子ども達が歓迎してくれて、K先生を探すと、後ろの方で子どもを膝に抱えてリラックスした感じでした。絵本で大盛り上がりした後、事務所で園長先生と雑談をしている時、「K先生、肩の力抜けてええ感じやんか！」と、ポロっと言ったんです。すると、お茶を入れてくれた園長先生の手が止まり、場の空気が変わりました。「僕、何言うてもたんかな？」と思っていたら、園長先生の目に涙が浮かんでいるんです。そして、お茶を出してくれながら小さい声で「ありがとう」って言うんです。

しばらくして、園長先生が訥々と話をしてくれました。実は、K先生の小学生の2人のお子さんも、津波で亡くなったんです。四月になって、新たにクラスの担任を決める時、人数が多くて大変な年長クラスには、みんな腰が引いています。K先生は真っ先に手を挙げました。「お願いですから、目の前のこの子ども達だけを見させてください」と言ったそうです。自分のことを振り返ったら辛くてしょうがない。せめて目の前のこの子ども達だけは守りたい。そんな気持ちで子ども達を見ていた時に僕は出会ったんです。だから笑顔がなかったんです。

「でも、五月のあの時、初めてあの先生笑ったのよ」僕が絵本を読んだ時です。だから園長先生は「ありがとう」って言うてくださったんです。

そんなK先生を、みんなが支えているんです。時には、K先生は気丈な人ですから、泣き虫の園長先生を励まします。そうやって一丸となって、保育士さんたちは子ども達を守っています。だから子ども達は安心していらんです。僕が出会った被災地の子ども達は、とても落ち着いています。大人が本気で子どもを守れば、子ども達は安心していらんです。

被災地以外で、落ち着きがない子ども達が急増している現状を目の当たりにすると、むしろ被災しているのは僕らじゃないかと思えます。

子育ての本質は、子ども達に何かを遺していくことだと思えます。僕は出会った子ども達に「安心感」を遺していきたいと思っています。「絶対的な安心感」を体に宿している子は、すべてを失っても生きていけると思えます。でもそういう思いがない子は、豊かな物に囲まれても、やっぱり孤独で寂しい思いをします。是非とも、そんな笑顔を残していつてもらえればなあと思えます。

そうすれば、安心しておはなしの世界で遊べる子ども達が、もつともつと増えます。想像力ももつともつと高まります。そういう子どもを増やすことが、日本の国力をあげることもつながると思います。

戦後の日本が、焼け野原から、ここまでの経済大国になったのは、先人の想像力だと思えます。

自分たちの手で、新しい未来をつくるような気持ちで子育てをしましょうよ。

(文責編集部)



取材を終えて

三浦氏の講演から問われたこと、それは想像力であった。想像力の低下は、子どもの問題ではなく、むしろ大人(自身)の問題であると。現代社会に生きる私たちの想像力の低下が無自覚の闇である。

論理的思考に縛られて「こうあるべきだ」と、自他ともに縛りつけ、奔放な思考を許さない社会(世界)を自ら創造してしまっていないだろうか。あるいは、「どうせ〜したところで」と結果を想定して諦めてしまう社会(世界)を創造してしまっていないだろうか。

また、想像力の低下は、仏教の力も低下させているのかもしれない。

たとえば、「浄土」という言葉は、かつては人の心を動かし、聞いた人の生活を変えるほどの響きを持っていたことだろう。しかし現在では、「死んだら終わり」という考えが私たちの根底にあり、思考停止してはいないだろうか。宗祖親鸞聖人が今ここにいられたら、「浄土」を何と表現されることだろう。

また、「後世」とは何を指すのか。私が娑婆を去った後の世(来世)であるのか、それとも、私が去った後も続く娑婆のことだろうか。後者の意味で考えると、原発の問題はどのように考えたら良いのだろうか。経済格差、少子高齢化、諸外国との関係、地域社会の崩壊、人権問題、就職難、いじめ、

虐待、環境問題など、娑婆が抱える諸問題は列挙すればきりが無い。未来を担う次世代の人たちにどのような世界(環境的にも精神的にも)を遺していくのか、それを考えることが「後世を祈る」とも言えるのではないかと。

講演後、私は「劫濁のときうつるには 有情ようやく身小なり(正像末和讃)」を「人間がだんだん小さくなっていく、自分のことしか考えなくなっていく」ことだと教えてくださった先生の言葉を思い出した。三浦氏の言われる「想像力の低下」は、「有情ようやく身小なり」を言い当てている。

私は何を願い、何を祈り、生きるのか。過去、未来、現在に思いを馳せ、人を思うところに私一人の生き様が問われてくる。過去、未来、現在を貫く「(今)いちのが、わたしを生きている」のであると、あらためて宗祖七五〇回御遠忌のテーマを教えられた講演であった。

(教化センター研究員 前田健雄)

ブックドクターしんちゃん
(NPO法人ほがらか絵本畑)に
ついての詳細はコチラへ。

HP : www.bookdoctor.jp

書籍紹介

ブックドクターしんちゃん の講演で取り上げられた絵本です。



『しんじなくてもいいけれど』 (ビリケン出版)

子どもの頃に見た風景や生き物は、とてつもなく巨大だったのに、大人になるとずいぶん小さく見えて驚くことがある。

子どもに見えていること、聞こえていること、感じていること、それが子どもにとっては真実であり、世界なのだ。

もしも子どものように世界を見ることができたなら、きっと毎日がワクワクと胸躍る日になるのでは？



『プアー』 (福音館書店)

可愛らしい犬の身体のあちこちが、「プアー・プアー」と膨らんでいきます。膨らんだ後、一体どうなるのでしょうか？

子どもたちがひっくり返って大笑いするステキな絵本です。



『ぴょーん』 (ポプラ社)

ぴょーん！ぴょーん！と飛び跳ねる生き物たち。

わたしもほくも、子どもはみんな「ぴょーん！」

と飛び跳ねずにはいられない！

子どもにとっては、虫も動物も人間もみな、同じ生き物だ。

なんで大人は「ぴょーん！」てやらないの???



『だいじょうぶ、だいじょうぶ』 (講談社)

男の子は成長とともに世界が広がっていきます。世界が広がると恐怖感や不安を抱きます。でも、おじいちゃんがいつ

もそばにいてくれて「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と勇気づけてくれます。

大人がつい忘れてしまいがちな大事なことを思い出させてくれる絵本です。

第24回平和展

「支配と『文化』」を終えて

去る3月15日から23日のお彼岸にかけて、第24回平和展を教務所1階議事堂にて開催した。

今年は「支配と『文化』」をテーマに、

第一部 植民地の「文化」

① 創氏改名

② 朝鮮語

③ 植民地朝鮮の「水雲教」

第二部 占領地の「文化」

① 「海外開教」と国家の統制

② 大谷派の「満洲開教」

③ 大谷派の「占領地開教」

の項目で展示し、期間中、およそ八〇〇人が訪れた。

来場者からは様々な声が寄せられたが、「最近、若者の間で戦争賛美に傾いているように感じる」「戦争の悲惨さだけでなく、どのように戦争が作り上げられていったかについても伝える必要を感じる」「昔を思い出し懐かしい」といった声が印象に残った。

平和展は、年度のはじめに平和展スタッフがテーマを定め、担当毎に研究・調査し、毎月交代で発表するかたちで学習会を積み重ねている。

私は、今回をはじめ「植民地朝鮮の『水雲教』」について担当させてもらったが、

自分の勉強不足、怠慢さがあり、遅々として学習は進まなかった。これまでの23回にわたる平和展では、「特別展」や「現代」のコーナーが設けられていたが、今回設けることができなかったのもそのためである。それにも関わらず、スタッフのみんなは誠実に助言して下さり大変感謝している。

平和展は、資料を、探し・読み・発表する、という作業を着実に積み重ねていくことによって成り立っている。

時に「とっつきにくい」「難解だ」「マニアックすぎる」といった批判を耳にす



るのも、この地道な作業があるが故だろう。だが、この表にあらわれない「積み重ね」こそが大事な作業なのである。

また、大谷派による戦争協力を表す資料も扱うことがある。「宗教が戦争に協力していたなんて知らなかった」といった意見も聞こえてくる。やはりこの作業も大事である。

資料にあたるという作業に私情は許されない。資料は冷酷であり、暖かくもある。資料に現れる「過去の事実」に向き合うことは、自身のアイデンティティが裸となるということだ。決して自分を外

教化センター 研究生 報告

研究生になって三年が過ぎようとしている。思い返してみると、研究生にならなければ足を運ぶ機会が無かったであろう様々なところへ伺わせて頂いた。

解放運動研修で訪れた、愛知県あま市人権センター、大阪府浅香市のお寺。教化センターで知り合った人の誘いで訪れた東日本大震災の被災地。そして四回の真宗本廟奉仕団。本当に様々なところに伺わせて頂いて、必ずあったのは思いもよらない「人との出会い」だった。

大阪の浅香で地元の本願寺派の住職と隣でお酒を飲んで話している時に「この状況っておもしろいな」と思った。解放運動研修がなければ一生顔を合せない確率の方が高かっただろう。

同じように福島、宮城の仮設住宅に住んでいる人達、一緒に炊き出しをした全国から集まったお坊さん達、NPOの人

に置いて他者を切り捨てるという姿勢が許されるものでもなく、悲歎される自他なのである。

一体自分はどこに立っているのか、誰とどう向き合おうとしているのか。親鸞聖人はどこを向いていたのか。資料を目の前にして、自らの言葉で語り、表現する時に湧出する緊張感は、他のどこでも味わえない。生きた運動がここにはある。今後も自分がどこを向いているのか確かめていきたい。

(研究員 小笠原智秀)

達、研修がキツカケで知り合ったボランティア団体、バンドメンバー、本山での教導さん、補導さん、一緒に奉仕団に参加した人達。

出会うたびに、「この状況っておもしろい。不思議だな」と感じてきた。

研究生を修了した後も、今までにできなかった繋がりを元に、さらなる出会いを楽しんでいきたいと思う。

(第7期研究生 小嶋朋大)



神戸和磨先生 お浄土に遷化される

去る3月2日、恩師神戸和磨先生が行年75歳を一期にお浄土へ遷られた。早朝4時、依頼された講義原稿に明け方まで赤を入れ続け、気分転換のため庭に出られたときだったという。最期まで真宗教学を後世に伝えようとした師の姿勢は聖人の、

口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もっぱら称名たゆることなし。『御伝鈔』

の姿に重なる。

清沢満之の教えを受け継ぎ、真宗大谷派近代教学の一人者として、曾我量深・廣瀬栄両師の伝統の上に、大谷大学ならびに同朋大学を中心に若手の育成に尽力され、同朋会運動推進の土台を支えてくださったのである。

教区教化センターへも永年にわたりご出講いただき、「唯信鈔文意に学ぶ」「正信念仏偈に学ぶ」などの講座に、ひと方ならぬご指導をいただいた。眼鏡の奥から漏れ出る眼光紙背に徹する力は、今だ忘れることができない。

清沢先生は「実験」とよく言った。我が身に受ける「実際体験」のことである。例えてみれば、教相は針金で、安心は電気である。針金を通して電流が流れる。針金がなかったら電流は流れない。信仰の感動も、教えが無くては流れない。「正信念仏偈」より

教団の教学・教化のあり様を念仏の息絶えるまで案じ続けられた師の言葉を、あらためて心襲に刻みたい。

(教化センター主幹 荒山 淳)



これまでの御功績に感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

INFORMATION

教化センター日報

■2012年12月
～2013年3月

12月6日 研究生・実習
「真宗門徒講座(釈尊伝⑧)」
7日 研究業務 「自死者追弔法要」後援
14日 研究生・学習会
「名古屋別院報恩講参拝」

21日 教化センター報恩講
1月15日 研究生・教化研修
「解放運動推進要員研修」参加
16日 研究生・教化研修
「第3回伝道スタッフ養成講座」参加
17日 HPリニューアル会議
23日 研究業務「平和展」学習会
25日 研究生・実習
「真宗門徒講座(釈尊伝⑨)」

2月6日 研究生・教化研修
「解放運動推進要員研修」参加
8日 研究業務「平和展」準備
7日～8日 教務所・教化センター研修旅行
12日 研究生・教化研修
「第4回伝道スタッフ養成講座」参加
15日 研究生・実習
「真宗門徒講座(釈尊伝⑩)」
18日 HPリニューアル会議

貸出しのご案内

名古屋教区教化センターにて出張用の御厨子を貸し出しています。

200代(長さ80.5cm幅33.5cm)までの御本尊を奉掛することができますので、寺坊での竣工式や、出先での研修会や講演会にて勤行をするなどにご利用ください。

※貸出期間など詳細は教化センターにお尋ねください。



写真は見本です。御本尊、三具足は貸し出しておりませんので各寺でご用意ください。

《編集子雑感》

先日、教化委員会主催の「あなたのお寺が避難所になったなら」と題した研修会に参加した。今この場で大地震が起こったらどうなるかをワークショップ形式で話し合った。職員を含め参詣者や研修参加者は、最低3日間ここで暮らさなければならない。さらに、近隣住民や帰宅困難者の避難も予測される。家族の安否も解らぬまま平静を保つことは可能なのだろうか。明日にも起こるかもしれない大災害。物心ともに日頃の備えを急ぐ必要があるように感じた。

(K)

公開講座のご案内 (聴講に費用はかかりません。お気軽にご参加ください。)

◆研究生教化研修

「真宗儀式の教相(第11回)」 ※僧籍者対象

講師 竹橋 太氏(本廟部出仕) 期日 2013年4月12日(金)
時間 午後4時30分～6時 会場 名古屋教務所1階 議事堂

■教化センター

〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

